

シ(四)からヨンへ

— 4を表わす言い方の変遷 —

安田 尚道

0 あらまし

現代東京語の数詞では、和語数詞にくらべて漢語数詞がかなり優勢である。しかし、4と7に限っては、和語数詞に由来するヨンとナナが他の漢語数詞に混じって用いられる場合が多い。4を中心にその実態と由来を探る。

1 現代東京語では4をどう言うか

現代東京語では、10よりも大きな数は原則的に漢語数詞を用いて表わし、和語数詞は用いない。しかし10以下の数も、常に和語数詞で表わされるわけではなく、漢語数詞がかなり用いられる。矢崎祥子(1966)は、和語の助数詞「東、房、声、山」等に付く数詞は、4までは和語数詞だが、5、6以上になると

漢語数詞にとつて替はれることを指摘している。算数の計算では、10以下の数も漢語数詞を用いるのが普通である。具体例を示そう。

3 + 5 = 8 「サン たす ゴは ハチ」

2 × 3 = 6 「ニ かける サンは ロク」

ところが4は一般に、シではなくヨン(またはヨ)と言う場合が多く、7もシチではなくナナと言う場合が多い。

3 + 4 = 7 「サン たす ヨンは ナナ」

4と7だけが特別なのである。

2 「四(シ)」が「死」と同音なので忌むこと

4を表わす漢語数詞の「四」が避けられた理由は、「四」が「死」と同音だ、ということである。

「四」は、「シ」と発音するために「死」に通う。俗人は

これを嫌った。大学病院系はこれを無視するが、一般の病院では「四病棟」「四号室」は、飛ばしてしまふ。

〔郡司正勝 (1997, p. 53)〕

このことはロドリゲス 1684 ~ 88 『日本大文典』にも詳しく記されている。これを土井忠生の訳文によって以下に示す。

①〇四つを意味する *Xi* (四) は或語とは一緒に使はれない。それは死とか死ぬるとかを意味する *Xi* (死) の語と同音異義であつて、異教徒は甚だしく嫌ひ、かかる語に接続した四つの意の *Xi* (四) はひびきがよくないからである。従つて、その代り、よみ、の *yo* (よ) を使ふ。こゝゑ、でありながら主として使はれない語は次にあげるものであつて、その他にも実例が教へてくれるものがある。

Do (度) は *Xido* (四度) と言はないで *Yodo* (よど) といふ。

Rui (類) は *Xirui* (四類) と言はなうで *Yorui* (よるゐ) といふ。

Nichi (日) は *Xinichi* (四日) でなく *Yocca* (よっか) である。

Ri (里) は *Xiri* (四里) —— 尻の意味にもなる —— ではなく、*Yori* (より) である。

So (艘) は *Xiso* (四艘) でなく、*Yoso* (よそう) である。

Nin (人) は *Xinin* (四人) —— 死人を意味する —— でな

く、*Yotari* (よつたり) である。

Nen (年) は *Xinen* (四年) でなく、*Yonen* (よ年) である。

〔土井忠生 (1985) 『ロドリゲス日本大文典』 p. 766〕
日本で「四」を忌んだ事例がすでに平安時代に見えることは、中村義雄 (1962, 1974)、太田品二郎 (1974) がいくつもの実例を挙げている (ただし、シをヨと言ひ換えた例ではない)。しかし、「死」という語との関わりということをはっきりと言つたのは鎌倉時代の『沙石集』が最古らしい (佐竹昭広・三田純一 1970, p. 121)。

②死トイフコトオソロシクイマハシキ故ニ文字ノ音ノカヨヘルハカリニテ四アル物ライミテ酒ヲノムモ三度五度ノミヨロツノ物ノ數モ四ライマハシク思ヒナレタリ (1283 頃『沙石集』(慶長一〇年刊古活字十二行本) 卷九「迎講事」)

3 「四」を忌むことは中国にはない

この「四」を忌む習俗は中国大陸にはない、ということ色々な人が指摘している。

中国文学専門の方や、それぞれから来日中の研究者、留学生に伺うと、中国では「四」の発音と「死」の発音とが同一ではないので、「四」を忌み嫌うということはない (略) そうであるが、韓国や台湾では、「四」と「死」とが同音であつて「九」と「苦」とは別音、日本と同様に病室番

号の四を欠番にしているとのことである。

〔鈴木博 (1986, p. 61)〕

ここに漢字の「四」と「死」の中国の各時期の漢字音を藤堂明保 (1978)『学研漢和大典』によって示す。なお () 内は拼音の表記。

	上古	中古	中世	現代
四	sied	si	si	si(s)
死	sier	si	si	si(s)

「四」と「死」は、中国中古音以後、声母(頭子音)も韻母も同じで声調のみ異なるが、声調に敏感な中国人は、「四」と「死」は発音が違う、と受け取るのが普通ようである。

一方、台湾や韓国では、鈴木も言及しているとおり、「四」を「死」という習俗がある。ただし、鈴木が、台湾では「四」と「死」とが同音である、とするのは問題がある。台湾の住民のうち、いわゆる本省人(第二次世界大戦終結以前から台湾にいたる漢民族)が話す閩南語でも「四」と「死」は声調は異なるらしいからである。ともかく、台湾や韓国に「四」を「死」と習俗があることは確かだが、これは日本の植民地支配によってもたらされたものではないかと考える。

4 4 という数への対処のしかた

「四」と「死」が同音で縁起が悪いといっても、現実には4という数は出てくる。それに対して昔の人はどう対処してきた

のか。それは三通りあった。

(1) シを和語の「ヨ」と言い換える。

(2) 数を足したり引いたり分割するなどして、4という数を別の数にする。

(3) そのままシという。

(2) の実例は中村義雄 (1962, 1974) や太田品二郎 (1974) が挙げている。

(1) の最古例と言えそうなのが、『更級日記』などに見える「よほう(四方)」である。

③ えもいはずおほきなるいしのよほうなる中にあなのあきたる中よりいつる水のきよくつめたきことかきりなし

〔1060頃『更級日記』〕

この『更級日記』の例について池上楨造 (1960) は言う。

「四」の「シ」を「ヨ」にすることはよく知られ、ロドリゲスも特に一言するところであるが、これは案外新しきである。「シ」の禁忌現象についてもっと考へねばならないのだが、数字を仮名で書くことはまれなのでなかなかこの問題に近づけない実状である。しかし、別義の四方八方の意のシハウがあつたはずだから、この場合には「シ」を「死」とはあまり問題にならない。むしろ意義分化のための変形とも考へられる。それにしても訓と音とが熟合する湯桶詞といふものは、原則として音読の語も日本化が早いものである。

〔p. 362〕

確かに、この「よほう」以外には、本来漢語のシ（四）が現われるべきところにヨが使われた例は一五世紀まで見えない。

ようやく「六世紀の「二・三・よ・五」「よこむ・五献・六こん」「三ノ膳・与ノ膳・五ノ膳」といった例が鈴木（1986, p. 71）（72）によって指摘されているのみである。

しかし、中村・太田によって平安時代の4を忘んだ具体例が報告され、②「沙石集」の記述が知られた現在、むしろ、シを忘んでヨと言ひ換えるのは「沙石集」（1283）のころ、さらには平安時代にもすであつた可能性は捨て切れなと思う。

さらに奈良時代については、『万葉集』に双六のさいころの目をよんだ「詠雙六頭訶」と題する歌がある。

④ 一二之目耳（のめはみみ）不有（ふあり）五六三（ふえくろ）四佐（よさ）倍有（ばいあり）來雙六（きこふ）乃（すなは）佐（よ）額（がく）「万葉集」
卷16・三八二七番

この歌の「四さへ」は、本来忘むべき四という数さへ々の意とも考えられよう。もしそうなら、四を忘むことは奈良時代にあつた、ということになる。

なお、和語数詞のあとに漢語助数詞が付いた湯桶洗みの古い例としては、985『古今和歌集』仮名序の「みそもじあまりひともし」や985『土佐日記』の「みそもじあまりな、もじ」がある。この場合の「もじ」は、語形がモンジでないこともあり、当時すでに漢語意識がかなり薄くなつていたのであろう。しかし「ほう（方）」はそうとは考え難い。

5 キリシタンのローマ字資料における「ヨ」

ロドリゲスは取り上げていないが他のキリシタンローマ字資料には載っている「ヨ」+「漢語」の例もいくつかある。

以下には、1591「サントスの御作業」・1593「天草本ヘイケ物語」・1595「羅葡日辞書」・バレット写本・1603「ヨ」・「日葡辞書」・1622「ロザリオ記録」・コリヤード1632「日本文典」・コリヤード1632「羅西日辞書」・コリヤード1632「懺悔録」・コリヤード1632頃「西日辞書」を調べて見つかった例と、ロドリゲス「日本大文典」が挙げている例を併せて挙げる。原文のローマ字は綴りが様々なので片仮名表記にして示し、出典名は太字の形に略称する。

ヨザ（四座）「ロザリオ・コ羅西日」

ヨサウ（四艘）「ロ大文典」

ヨダン（四段）「羅葡日」

ヨド（四度）「ロ大文典・コ文典・コ西日」

〔他に「ヨタビ」〕「羅葡日」あり

ヨニン（四人）「羅葡日」

〔他に「ヨッターリ」〕「サントス・ヘイケ・羅葡日・ロ大文典・コ文典・懺悔録・コ西日」あり

ヨネン（四年）「サントス・羅葡日・ロ大文典・コ文典・コ西日」

ジュウヨネン（十四年）「サントス」

ヨホウ・ヨハウ(四方)〔羅葡日・日葡・コ西日〕

ヨリ(四里)〔ロ大文典・コ文典・コ西日〕

ヨリン(四厘)〔コ文典〕

ヨルイ(四類)〔ロ大文典〕

6 キリシタンのローマ字資料における「シー」

キリシタンのローマ字資料に見える「シー」の例を、紙面節約のため漢字表記にして示す。

6・1 助数詞に続く場合など

ロドリゲス『日本大文典』には、4をシと言った例もかなりある。このうち、普通の名詞として扱うべきもの(「四季」「四月」など)や固有名詞(「四郎」「四条」など)や名数語彙(「四書」「四海」など)を除いても、以下のようなものがある。

四分・四尺・四間・四丈・四匁四分

以下、他のローマ字資料に見える「シー」の例を挙げる(出典名は省略)。

第四・四階・四角ナ・四卷・四方・四番・四匹・四俵・四本・四尺・四箇月・四畳半・十四・十四箇国・十四番・

第十四・二十四騎・四十・四十年・四十日・四十三人・四

十五・四百・四百度・四百度・四百十年・千四百七十

九年目・四千

6・2 概数表現の場合

概数表現では、現代東京語でも「シゴニン(四五人)」のように「シー」を含む言い方をするが、キリシタンのローマ字資料でも同様で、以下のような例がある。

四五尺・四五町・四五帖・四五日・四五人・四五年・四五本・四五枚・四五六度・四五百・四五百人・十四五・十四五丈・十四五人・十四五六

この他、次のように「サウシー(三四)」の例がある。

soxinin (三四人)〔ヘイケ〕

soxinen (三四年)〔ヘイケ〕

soxiu (三四十)〔ロ大文典〕

so xijunen (三四十年)〔コ文典〕

So ximome (三四匁)〔ロ大文典〕

so ionen (三四年)〔コ文典〕

「サウシー」は「サンシー」の転と考えられるが、「サンシー」の形は上記のキリシタンローマ字資料には見当たらない。この時代には、単独の「4人」「4年」は「ヨッタリ」「ヨネン」と言っていたが、概数表現に限り、古くは単独でも使われた「シニン」「シネン」の形が用いられたのである。

この他、「so ionen (三四年)」「コ文典」という形も見えるが、これは「シネン(四年)」という形に対する抵抗感が強くなつたために「サウシネン」を言い換えたものであろう。

6・3 どういう場合に「ヨ」なのか

以上の「シ」の実例から、キリシタンの時代は「ヨネン（四年）」「ヨド（四度）」「ヨリ（四里）」のような特定少数の言い方を除いては、広く「シ」と言っていたことがわかった。では、5に示したような「ヨ」と言い換えられた言葉はどういう条件の言葉なのか。

意味の面から見て、これらの言葉だけを特に「ヨ」と言い換えなければならない理由が見当らない。

音韻の面では、「ヨ」と言い換えられた場合の助数詞は、s・z・d・n・f・rで始まるもので、実例が見えないのはk・g・t・m・y・wで始まるものと母音で始まるものである。これだけの材料から何か結論を引き出すのは困難である。

7 端数表現における4

現代語では、単独のサンニチ（三日）やゴニチ（五日）という言い方はほとんどしないにもかかわらず、13日・15日をジユウサンニチ・ジユウゴニチと言う。これは、10を越える数は漢語数詞で表わす、という原則に沿ったものである。しかし14日はジユウヨッカという和漢混淆の言い方をする。キリシタン資料にもすでにジユウヨッカはあるが、さらに「ジユウヨツタリ（十四人）」という言い方も見える。

ジユウヨツカ（十四日）「ヘイケ」

ニジユウヨツカ（二十四日）「サントス・ヘイケ・コ西日」

シジュウヨツタリ（四十四人）「サントス」

当時は4人はまだヨツタリが普通で、ヨニンはあまり一般的ではなかったから（8参照）、現代語で14人をジユウヨニンと言うところをジユウヨツタリと言ったわけなのであろう。

8 4人の言い表わし方

キリシタンのローマ字資料では、3人・4人・5人は、一般的には「サンニン・ヨツタリ・ゴニン」である（ヨニンの形も『羅葡日辞書』には見えるが）。3人と5人が漢語数詞で表わされるのに、その中間の4人が和語数詞なのは、ロドリゲスも言うとおり、シニンという「死人」と同音の形を避けたものであろうが、その結果、人数表現の体系をゆがめることになった（1人・2人も、当時はイチニン・ニンンの形の方がヒトリ・フタリよりも多く使われた）。

古くは「シニン」という形があったが、用例は極めて限られる。私が現在知りえている例は、『平家物語』や平曲の写本に見える、漢字「四人」に振仮名を付したものである（ただ、「シニン」という全語形を示したものは少ない）。以下、複製本によって確認しえた、『高野本平家物語』・『青洲文庫本平家正節』（天保六（1835）年識語）・『前田流譜本平家物語』（早稲田大学演劇博物館蔵、享和三（1803）年）の例を挙げる。

⑤ 去 保元（ヤシノ）に父悪左（オホサ）おほい殿の縁座（エシザ）によって、兄弟四人（ケイゴ）流罪（ルザイ）せられ給しか（『高野本平家物語』巻第三・大臣流罪）

⑥ 1a 二條猪の熊なる所にて・四人討とり二人生どりにして
〔青洲文庫本平家正節〕卷四上・信連合戦〕

⑥ 1b 二条猪の熊なる所にて四人討とり二人生捕にして〔前
田流譜本平家物語〕四上・信連〕

⑥ 2a 兄弟四人流罪せられ給ひにき〔青洲文庫本平家正節〕
卷十上・大臣流罪〕

⑥ 2b 兄弟四人流ざいせられたまいにき〔前田流譜本平家物
語〕三下・大臣流罪〔シ〕は朱書〕

⑥ 3a 惣じて四人ひとつ車に打乗つて〔青洲文庫本平家正
節〕卷十一上・妓王〕

⑥ 3b そうじて四人ひとつ車にとりのをて〔前田流譜本平家
物語〕一下・妓王。〔シ〕は朱書〕

⑥ 4a 四人一所に籠り居て朝夕佛前に花香を備へて〔青洲文
庫本平家正節〕卷十一上・妓王〕

⑥ 4b 四人一所にこもり居てあさゆふ仏ぜんに花香をそなへ
〔前田流譜本平家物語〕一下・妓王〔シ〕は朱書〕

⑥ 5a 四人の尼共皆往生の素懷を遂ける〔青洲文庫本平家正
節〕卷十一上・妓王〕

⑥ 5b 四人のあまども皆往せうの素懷をとげける〔前田流譜
本平家物語〕一下・妓王〕

⑥ 6a 過去帳にも妓王妓女佛刀自等が尊霊と四人一所に入ら
れたり〔青洲文庫本平家正節〕卷十一上・妓王〕

⑥ 6b 過去帳にも妓王妓女佛刀自等がそんりやうと四人一所

にいれられたる〔前田流譜本平家物語〕一下・妓王〕

⑥ 7a 矢庭に敵三騎切て落し四人に當る敵に逢ふて押双べ
〔青洲文庫本平家正節〕卷十四上・樋口被斬〕

⑥ 7b 矢庭にかたき三騎切て落し四人にあたるかたきに逢て
おしらべ〔前田流譜本平家物語〕九上・樋口被斬〔シ〕
は朱書〕

⑥ 8a 中納言四人三位の中將も三人迄おはしき〔青洲文庫本
平家正節〕卷十五下・一門大路被渡〕

⑥ 8b 中納言四人三位の中將も三人までおはしき〔前田流譜
本平家物語〕十一下・一門大路被渡〔シ〕は朱書〕

高野本は室町時代、青洲文庫本・演劇博物館本はいずれも江
戸時代の写本であるが、江戸時代には一般にはシニンという形
は全く使われていなかったようだから、シニンは『平家物語』
の語りの伝統の中に残ったものであろうと思う。

『羅葡日辞書』には、4人を意味する語としてヨツタリとヨ
ニンの両方が載っているのであるが、他のキリシタンのローマ
字資料にはヨニンは見えない。数詞について詳しく論じている
ロドリゲス『日本大文典』やコリヤード『日本文典』もヨニン
には全く言及していないのである。まだ、しかるべき語として
認知されていなかったものであろうか。

なお、ヨニン（4人）と同音の言葉として、「十余人」「二十
余人」などと言うときの「十余人」がある（『天草本ヘイケ』に
「ニシユウヨニン」の例がある）。この当時すでに4人の意のヨ

ニンは生れていたわけだから、これは同音衝突を起こすはずである。ただ、「余人」は硬い文章語であって、話し言葉では「ニンマリ」と言えよかつたのであるうか。なお、「ネン(年)」についても、「ヨネン(4年)」と「ヨネン(余年)」の問題がある。

一六〇〇年前後のキリシタン資料ではほとんど認知されていなかったヨニンだったが、一六五〇年ごろにはすでに京都などでも定着していた、ということを示す資料がある。

⑦ 一人二人三人四人といふべきをさんになよつたりといふことは少しもくるしからず。よたりと哥にはよみたれともつねにいふには耳にたちてわろし

〔安原貞室1680「かたこと」巻三・人倫并人名之部〕
⑧ 古は四人をよにんとは唱へず、しにんと唱へしと聞ゆ

〔本居宣長1804「飯高隨筆(本居宣長隨筆第十二巻)」
なお、洪川版「御伽草子」(1680年頃)の「鉢かづき」と「酒呑童子」には、それぞれ漢字に振仮名のついた「四人」がある。
『日本国語大辞典 第二版』は「よにん」「四人」の項でこの「鉢かづき」の例を「室町末」のものとして引くが、江戸時代に入ってからのものですべきものかも知れない。

9 明治・大正時代の4

江戸時代については漢数字に振り仮名を付けたものは極めて稀なので、全体像は容易にはわからない。現行の活字本で「四」

にルビが付けられているものも、版本・写本にあたってみると振り仮名がない、というケースが少なくない。

チェンバレン (B. H. Chamberlain) はその著 1888 『A Handbook of Colloquial Japanese』の CHAPTER VI/The Numerals でヨへの言い換えについて述べている。これを大久保恵子 (1939) の訳文によって以下に示す。

⑨ 『155 慣習が数詞に種々の奇妙な現象をもたらす。例えば漢語の数詞シ (four) はシ (death) と同音で縁起が悪いというので多くの場合これと同義の和語数詞ヨに代えられる。例えば、

○エーニン four persons. (シーニン is a corpse の意)

○ニージューオーベン No. 24. [p. 99]

さらに、漢語のシチ (七) はシ (四) と紛れるのを避けてナナと言い換え、商人はしばしばシチジッセン (七十銭) のかわりにナナジッセンと言う、と述べる。ただし、ヨン (四) という形についてはこの初版では触れていない。これが翌一八八九年の再版では、『155』以下の注が加えられた。

⑩ N. B. The vulgar sometimes go a step further, corrupting the *yo* into *yon*. Thus they will say *yon-jū*, instead of *shi-jū*, "forty." [p. 103]

“庶民は時には更に一歩進んで、ヨをヨンと訛る。そこでシージュー (四十) のかわりにヨンシージューと言うだろう。”というのである。

ヨについて日本人が文法書で言及するのは、もつと遅い。

①「四」が他の語に結び附いたときの呼び方にわ、次のような習慣がある。

(一)よというもの、

十四年 二十四圓 四疊半 四人 四里

(二)しというもの、

四艘 四軒 四回 四冊 四季

(三)し、又わ、よというもの、

十四行 廿四枚

〔国語調査委員会 (1916) 〔口語法〕 p. 15〕

〔口語法〕は実質的には大槻文彦が執筆した文法書である。現代の実態とはだいぶ異なるが、ここでようやく、ヨとのみ言う例、シとのみ言う例、シ・ヨ両方に言う例、の三通りあることがはっきり指摘された。しかし、さらにヨンという言い方があることは、〔口語法〕の「附録」である〔口語法別記〕でようやく取り上げられた。

②数を呼ぶに、次のように云ふことがある、聞きちがわせぬ爲である。

ふたひやくとんじゅうはん
二百四十番 四百七十九圓

〔国語調査委員会 (1917) 〔口語法別記〕 p. 12〕

〔口語法〕の「しというもの」の例のうち、現代東京語でもシと言うのは「四季」だけであろう。なお、ロドリゲス『日本大文典』がヨソウだとした「四艘」は、どういうわけか、この

「しというもの」の類に入っている。

〔口語法〕が「ヨとのみ言う例」として挙げた「十四年 二十四圓 四疊半 四人 四里」のうち「二十四圓 四疊半」以外はすでにキリシタン資料でも「ヨ」の形であらわれている。一旦「ヨ」の形が定着したものは、ほとんどそのまま後世まで引き継がれたのである。「四疊半」はコリヤード『西日辞書』ではシヂョウハンであった。貨幣単位としての「円」は明治に作られた新しい語である。

明治時代には、まだまだシの勢力が大きかったことは、この時代に刊行されたものを見るとわかる。以下には、福沢諭吉 1880『世界国尽』・坪内逍遙 1880『小説神髓』・尾崎紅葉 1888『金色夜叉』・徳富蘆花 1900『不如帰』・島崎藤村 1906『破戒』・国木田独步 1906『運命』・文部省 1908『假作物語』に見える例を挙げる(初版本の複製本による)。

シの例 第四〔破戒〕・四箇村〔假作物語〕・四箇月〔小説神髓・假作物語〕・四學年〔假作物語〕・四學年生〔假作物語〕・四週間〔破戒〕・四尺〔破戒〕・四寸〔不如帰〕・四斗七升〔破戒〕・四本〔破戒〕・四割〔金色夜叉〕・三四ヶ月〔小説神髓〕・三四盃〔運命〕・十四歳〔假作物語〕・二十四〔破戒〕・四十男〔運命〕・四十女〔破戒〕・四十分〔假作物語〕・四十錢〔破戒〕・四十戸〔破戒〕・四十年〔運命〕・四拾貳錢〔假作物語〕・四百八十尺〔世界国尽〕・四千米突〔不如帰〕・四千萬人〔世界国尽〕・千二百九十

四萬坪〔世界国尽〕・四億〔世界国尽〕・四億二千萬人〔世界国尽〕

ヨの例 四時〔不如帰〕・四時四十分〔假作物語〕・四月〔不如帰〕・四人〔破戒〕・四年〔破戒〕・四番〔破戒〕・四番目〔破戒〕・三四人〔假作物語〕・三四日〔假作物語〕・三四里〔世界国尽〕

「ヨン」の例は上記の資料には見つからなかった。ギリシタイン資料よりも増えた「ヨ」+「漢語」の例は、ここでは「四時」だけである。

なお、旧制の「第四高等学校」(金沢市)は、略称も「シコウ(四高)」であった、と関係者から聞いたことがある。

10 現代における4と7

現代東京語においても、以下のような言い方ではシと言うのが普通である。

四角・四角四面・四方・四肢・四辺形・四面体・弦楽四重奏・四則演算・四通五達・四分五裂・四分音符・四の日(縁日)・四半世紀・第一四半期・十四(年齢)・十四五歳・二十四節気・四十(年齢)・四十肩・四五十個・四十七士・四十八手・四十九日(死後49日目)・四万六千日

しかし、これらは現代では例外である。現代では4・7は、普通にはシ・シチではなくヨン(ヨ)・ナナと言うことが多い。4を単独に言うときはほとんどの場合ヨンと言うが、7はナナ

とシチの両形が広く使われる。たとえば「4たす5」を「シたすゴ」と言うことはまずないのである。

「シ(四)」が忌まれて「ヨ」と言い換えられたのに対し、「シチ(七)」は忌まれたというわけではなく、単に「シ(四)」や「イチ(一)」とまぎれることを避けて言い換えられたのであろう。数値を特に正確に伝える必要のある場面(取引所、算盤の読み上げ算、電話番号の伝達など)では、聞き誤りがないように色々配慮し、現代でもたとえば「二一〇円」をフタヒヤクトオエン、「二一〇番」をヒヤクトオパンのように言うわけである。

「昭和十七年の十月に兵隊にとられ」という山本七平(1958)によれば、旧日本陸軍では4・7は必ずヨン・ナナと言うように決められていたというが、これがいつごろからのことなのかまだ調査できていない。明治時代後半でもまだまだシが優勢だったのが現代のようなヨン優勢になるには、軍隊経験者の増加ということも関係しているのかも知れない。

11 ヨとヨンの使い分け

NHK放送文化研究所(1988)『NHK日本語アクセント辞典 新版』の付録に「数詞+助数詞の発音とアクセント一覧表」がある。これには二七〇の助数詞が取り上げられ、一から一〇までの数詞と結合したときの語形が示されている(「回忌」の4の項は実例がないので空欄)。

この一覧表の二六九の助数詞に付く4の語形は、次のような

六タイプに分けられる。A「ヨンのみ」、B「ヨンVヨ」(ヨンが主でヨが従)、C「ヨのみ」、D「ヨVヨン」(ヨが主でヨンが従)、E「シのみ」、F「その他」(へ)内に示された古い言い方は取り上げない。A、Fそれぞれのタイプについての助数詞の語種別の数は以下の通りである。

	和語	漢語	外来語	合計
A ヨンのみ	五	一五五	五二	二二二
B ヨンVヨ	六	一四	〇	二〇
C ヨのみ	七	一二	〇	一九
D ヨVヨン	八	六	〇	一四
E シのみ	〇	二	〇	二
F その他	二	〇	〇	二

これらのうちの少数例は以下の助数詞である。

- A ヨンのみ「和語」型・組(学級)・試合・場所・割
 B ヨンVヨ「和語」株・切れ・組(一般)・粒・坪・棟
 B ヨンVヨ「漢語」錠・台・第○番・段(一般)・段式・度・度目・番・番手・番目・枚・幕・名・厘
 C ヨのみ「和語」重ね・口・揃い・度・月・柱・振
 C ヨのみ「漢語」時・時間・時限・次元・段(段位)・人・人前・年・年生・暮目・里・腕

- D ヨVヨン「和語」色・桁・皿・束・玉・通り・箱・部屋
 D ヨVヨン「漢語」円・児・次・字・畳・鉢
 E シのみ「漢語」位(旧官位)・月(暦月)
 F その他「和語」ヨッカ・ヨツカメ

以上から、A「ヨンのみ」付くのは主に漢語助数詞であることがわかる(例外的に付く和語助数詞も、多くは助数詞というよりは名詞に近い)。本来「シ」と言っていたものを「ヨン」が引き継いだということなのであろう。

12 「一二三四五六七八九十」と数える場合と「十九

八七六五四三二一」と数える場合の唱え方の違い

「一二三四五六七八九十」と数える場合には四をシと言うのに「十九八七六五四三二一」と数える場合には四をヨンと言うのはなぜでしょう、と質問を受けたことがある。なるほど言われてみると、私自身も質問の通りの言い方をしているようである。

1・2・3・4・5・6・7・8・9・10と小さい方から順に漢語で早口で唱えるときは、「イチ・ニ・サン・シ・ゴ・ロク・シチ・ハチ・ク・ジュウ」という言い方が定着していて日常的に広く用いられる。この言い方は、日本人なら誰もが幼いときに覚えさせられ、しつかり身につけている。これを声を出して早く言えるようにしておかないと、かくれんぼなどの遊びをするときにも困ることになるわけである。

このように、「イチ・ニ・サン・シ・ゴ・ロク・シチ・ハチ・ク・ジュウ」は幼いときから慣れ親しんだ言い方で、歌の歌詞のごとく一続きのものとして覚えているので、その中のシやシチを「昔ふうの古い言い方だ」と感じる人はいない。しかし、現代における4や7の言い方の実態からすれば、むしろ例外的なものであることはすでに見たとおりである。

大きい方から逆に10・9・8・7・6・5・4・3・2・1と唱えるときは、大抵の人が「ジュウ・キユウ(ク)・ハチ・ナナ・ロク・ゴ・ヨン・サン・ニ・イチ」と唱える。

大きい方から唱えることはおよそ日常的でないし、誰かに教え込まれたこともないから、数を一一つ頭に思い浮かべながら言うことになり、日常、単独に言うときのヨン・ナナが用いられるのであろう。

13 ヨンは和語か漢語か

『日本国語大辞典』の初版では「よん【四】」の項には、由来の説明として、「(よ【四】)の変化した語」とあるだけであった。私は第二版で数詞関係の語を担当したので、つぎのようにやや詳しく説明しておいた。

〔よつ(四)〕の語幹「よ」が漢語数詞「さん(三)」の類推で変化したもの

本来れっきとした和語数詞であったヨが漢語助数詞とともに用いられる場合、和漢混淆による異和感が問題となる。しかし、

聞き誤り防止といった要請もあって、「ヨ+〔漢語〕」の使用例はどんどん増えていく。その際の異和感が解消されるためには、ヨが少しでも和語らしからぬ形になることが望ましい。すぐ隣の数である3の語形サンを無意識のうちにまねて出来上がったヨンは、ンで終るといいう、まさに和語らしからぬ形の言葉であった。

この和漢混淆の「ヨン」について「和語か漢語か？」と問うのはもちろん無理な話である。しかし、11に見たように、「一覽表」に示された、「ヨン」のみが付く助数詞全一二語のうち、和語助数詞はわずか五語に過ぎない。「ヨン」は和語系列の助数詞とは共起しにくいのである。語源はともかく、実際の使われ方から見ると、「ヨン」は漢語数詞の系列に入るものと言うべきなのである。

注

- (1) 「迎講事」はテキストにより収める巻が異なり、俊海本及び略本系諸本の「迎講事」にのみこの記述がある。
- (2) 台湾の台南市生れの王育徳(1957)『台湾語常用語彙』(p. 258, p. 390)によれば、「四」はsi(3声)、「死」はsi(2声)で声調が異なる。なお、朝鮮漢字音は「四」「死」ともにsiである。
- (3) 「よほう」は『更級日記』のあと、1184『雅亮装束抄』・1376『増鏡』や抄物にも見える(福島1961, 池上1960)。

(4) 「來」は『万葉集』の諸テキストのうち『古葉略類聚抄』

にのみある。「來」のないのが本来だとした場合、「けり」を勝手に読み添えるのは無理だが、それでは第四句は音数が不足するから、数字をすべて訓読して「よつさへあり」とすべきだ。との説もある。

(5) ローマ字資料では *yo* と *yo* の両方の形があり、後者は誤りとされるが(福島1961)、ここでは立ち入らない。

(6) コリヤード『西日辞書』には、4日を除いて、日数の漢語の言い方(イチニチ・ニニチ・サンニチ……ジュウニチ)が和語の言い方(フツカ・ミツカ……)と並んで示されている。また、『ロザリオ記録』には漢語のサンニチ(3日)がいくつも見える。

(7) 北原保雄・小川栄一『延慶本平家物語総索引』には「しにん」「四人」が一例あるが、本文を見るといずれも振り仮名なし。西端幸雄・志甫由紀恵『土井本太平記本文及び語彙索引 索引篇』には「しにん」「四人」が二八例あるが、本文を見るといずれも振り仮名なし。

(8) 安田(1991)「人数詞」では『羅葡日辞書』の例を見落としていた。室井努(1993) 参照。

(9) 『天草本ヘイケ物語』では「ヨニン」と「ニンアマリ」の両方が見えるが、後者の方が多い。

(10) たとえば、岩淵匡・桑山俊彦・細川英雄(1998)『醒睡笑 文庫索引編』の見出しには「よんすん(四寸)」があるが、

(11)

本文(p.129)は漢字で「四寸」で振り仮名なし。小学館『新編日本古典文学全集64』所収の167『御伽物語』に「廿四町の坂道」(p.99)とあるが、富山大学ヘルン文庫本(写真による)でも、京都大学国文学研究室蔵本(『古典文庫65』)でも、「廿四」には振仮名なし。

(12)

大久保恵子(1999)に第2版の影印を収める。

文法書以外で私が今知る「ヨシ」の最古例は、塚原健二郎の童話1937『七階の子供たち』の、「ボオルは三階、四階、五階とだん／＼に子供達をはこんで」(p.228)。筑摩書房『明治文学全集』18所収の『金色夜叉』中編第七章(p.301)やその底本である中央公論社1941『尾崎紅葉全集』第六巻(p.300)には「二千四百六十日」とあるが、初出の『読売新聞』明治三〇(1897)年10月31日、最初の単行本である1899『金色夜叉 中編』(春陽堂)(p.123)、博文館1904『紅葉全集』第六巻(p.286)では数字にルビはない。このルビは中央公論社版全集第六巻の校訂者の塩田良平による新しいものらしい。

(13)

額田淑(1960)によれば、旧日本海軍では、マルヨンフナナ(四時二十七分)・「三〇一三」(第三百一海軍航空隊)のような言い方をしたという。一方、徳富蘆花(1960)『不如帰』下篇(二)には明治二十七年の海戦の場面が描かれていて、そこには「シ」という言い方が出てくる。

⑬ 1「四千米突」の語は、遍ねく右舷及艦の首尾

に傳はりて、

[p. 253]

⑬ 2 速力大なる先鋒隊の四艦を遣はして、[p. 257]

これらの例の近くには「我が三十二瓏巨砲」(p. 257)という言い方が見える。「サンチ」はセンチのことで、大砲の直径を言う時の軍隊独特の言い方(フランス語に由来)であるから、「四千米突」も当時の海軍における言い方の実態を正しく伝えていると見て良いと思われる。そうだとすると、軍隊では明治の末から昭和の初めまでの間に「シ」から「ヨン」への言い換えが行われたことになる。

(14)

一九九九年九月、東京のフジテレビの朝の番組「めざましテレビ」の制作スタッフから質問を受けた。結局この番組に数十秒間出演して説明することになった。

(15)

ヨンの使い方には方言差もからむらしい。鈴木は言う。

数詞の「四」だけでなく、「し」の字のつく言葉全部を禁じるのが、落語の「しの字嫌い」である。(略)武藤愼夫氏の『落語三百題』(下、八一頁)のあらすじ中に、

「よん貫よん百よん十よん文」そんな勘定が、どこにある」

とある点について、関西では「四」を「よん」と言うのが普通なので、上方落語では右の箇所をどう表現し

ているかが気になり、桂米朝師匠の令息小米朝さんに尋ねたところ、

この落語は大阪ではほとんどやらないが、東京落語の場合「よん」でなく「よ」というのが普通である。

むかし江戸では——明治以降も——銭勘定は「いち、に、さん、し、ご、ろく、しち、はち、く、じゅう」が普通で、これに対して大阪的勘定は「いち、に、さん、よん、ご、ろく、なな、はち、きゅう、じゅう」である。

大阪ではこのサゲが使いにくいので、別の形になる。

という返事を頂いた。つまり関東では「よ(ん)貫」という銭勘定が普通でないから、隠居の「そんな勘定がどこにある」という言葉が飛び出すのであり、他方、関西では「よん貫」という勘定の仕方に全く抵抗感がないので、このままではサゲへ持つて行きにくいわけである。

(鈴木 (1986, p. 63-64))

(16)

数詞のように助数詞に付く「ナン」(何)も、漢語助数詞(および外来語助数詞)に付くが和語助数詞にはやや付きにくく、「ナン月」「ナン度」は言えない。これも、ナンという形が和語的でないことと関係するか。「ナンゴ(何個)」という形が室町時代にすであつたよう

『日本国語大辞典』の「なん」「何個・何箇」の項参照、「なん」「なん万」という例も『平家物語』にある。

引用文献

池上楨造 (1960) 「方」字の合音用法」〔島田教授古稀記念国文学論集〕、

関西大学国文学会、p. 343 ~ 354。〔再録：池上 (1984) 『漢語研究の構想』、岩波書店、p. 103 ~ 117〕

NHK放送文化研究所 (1998) 『NHK日本語アクセント辞典新版』、日本放送出版協会

王 育徳 (1957) 『台湾語常用語彙』、永和語学社、東京
大久保恵子 (1990) 『チェンバレン 日本語口語入門』第2版

翻訳 付索引、笠間書院

太田品二郎 (1974) 『歴史手帖』「四の数を忘む」とは平安時代に溯る」〔日本歴史学会『日本歴史』第314号 [1974年7月号]、吉川弘文館、p. 47 ~ 48〕〔再録：太田 (1992) 『太田品

二郎著作集』第3冊、吉川弘文館、p. 174 ~ 176〕
郡司正勝 (1997) 『和数考』、白水社

佐竹昭広・三田純一 (1970) 『上方落語 下巻』、筑摩書房
鈴木 博 (1986) 「四の字嫌い考——「四」の音「シ」が「死」

に通じることを思ふ現象について——」〔日本語語源研究会『語源探求』、明治書院、p. 60 ~ 91〕〔再録：鈴木 (1998) 『国

語学叢考』、清文堂出版、p. 1 ~ 35〕
土井忠生 (1955) 『ロドリゲス日本大文典』、三省堂

藤堂明保 (1978) 『学研漢和大字典』、学習研究社

中村義雄 (1962) 「王朝の風俗と文学」(塙選書)、塙書房 (p. 27 ~ 28; p. 169; p. 206) 「四」を忘む」とを論ずる

中村義雄 (1974) 『歴史手帖』「四の数を忘むこと」に寄せて」〔日本歴史学会『日本歴史』第318号 [1974年11月号]、吉川

弘文館、p. 33 ~ 34〕
額田 淑 (1960) 「海軍の言語生活」〔筑摩書房『言語生活』第

110号 [1960年11月号]、p. 56 ~ 61〕
福島邦道 (1961) 「四方なる石」〔国語学会『国語学』第46集、

p. 76 ~ 82〕〔再録：福島 (1988) 『語史と方言』、笠間書院、p. 143 ~ 153〕

室井 努 (1993) 「羅葡日対訳辞書の数詞における和語・漢語の混用について」〔金沢大学国語国文学会『金沢大学国語国文』第

81号、p. 31 ~ 40〕
矢崎祥子 (1999) 「助数詞の類別機能および数詞と助数詞の組み

合わせ——和語・漢語の視点からみた六つ、六房、六個など——」〔言語と交流研究会『言語と交流』第2号、p. 127 ~ 139〕

安田尚道 (1991) 「人数詞」〔国語学会『国語学』第104集、p. 29 ~ 42〕

山本七平 (1973) 「むかしのことば 7」日本陸軍のことば——
山本七平氏に聞く——〔筑摩書房『言語生活』第262号 [1973

年7月号]、p. 104 ~ 111〕

(やすだ・なおみち／本学教授)